

平成 21 年 5 月 28 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006-2008
 課題番号：18520234
 研究課題名（和文） 15・16世紀ドイツ本草書のヨーロッパ諸国への影響について
 研究課題名（英文） The Influences of the German Herbals of the 15th and 16th Century upon the European Countries

研究代表者
 荻野 蔵平(OGINO KURAHEI)
 熊本大学・文学部・教授
 研究者番号：00134429

研究成果の概要：

近世初期の本草書（植物誌）の成立には、特にドイツのマインツにおいて15世紀末に出版された一連の本草書が極めて重要な位置を占めている。しかしながら、これら文献資料の体系的な研究は、ヨーロッパ、日本を問わずまだ手つかずの状態にある。本研究は、文献学的方法により、1)当時の本草書の主たる役割は医学書であったこと、2)そこには中世の占星術的・呪術的説明と近世自然科学の実証的な記述の両方が混在していること、3)本草書の理論は古代の医学者によって整備された「体液病理説」「四大説」に基づいていることを明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,400,000	0	1,400,000
2007年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	570,000	3,870,000

研究分野：独語学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：ヨーロッパ語系文献学，ドイツ本草書，植物誌，中世植物学，中世医学，体液病理説，四大説

1. 研究開始当初の背景

ヨーロッパ近世初期において中世の本草書（植物誌）がどのような経緯を経て植物学へと変貌していったのかという問題についてなされた包括的研究はまだ存在しない。

この分野についての英語圏の研究としてまず Agnes Arber: Herbals (1938) という世界的名著があるが、概括書としての性格が強

く、さらに詳しく知りたい場合には物足りなさを感じる。その他にも、Blanche Henry: British Botanical and Historical Literature before 1800 (1975) や Frank J. Anderson: An Illustrated History of Herbals (1977) などがあるが、そのうち前者はその第1巻が本研究で問題とされる時期を扱っているが、簡単な記述にとどまっている。また後者も説明が単発的で、体系的な記述が

なされているとは言い難い。

一方、ドイツ語圏の代表的な先行研究としては Hans Zotter: *Das Buch vom gesunden Leben* (1988)ならびに Brigitte Hoppe: *Das Kräuterbuch des Hieronymus Bock* (1969)などがある。前者は 1530 年代の植物誌の諸特徴を知るには極めて有益であるが、特にアラビアの医師 Ibun Butlan との関連に重点を置いて述べたものであり、この期の植物誌全体の流れを知るには十分とはいえない。また、後者も同じく 1530 年代の植物誌についての貴重な情報を与えてはくれるが、ドイツ人の神父にして医師の Hieronymus Bock の本草書に特化しての研究であり、包括的な研究書にはなっていない。

このようにヨーロッパ中世後期から近世初期にかけての本草書については、日本のみならず、ヨーロッパにおいても、いまだ緻密な文献調査に基づく体系的研究がなされていないのが現状である。今後益々関心が高まると考えられるこの領域についての本格的な学問研究を始動するためにも、まずはこの時代を代表する本草書の比較文献学的な基礎調査が必要となる。

2. 研究の目的

ヨーロッパ中世後期から近代初期にかけての植物誌の成立を記述する場合、特に重要な役割を果たしたと考えられるものに 15 世紀末のドイツで出版された一連の植物誌があることはすでに上で述べたとおりである。それは具体的には次の 3 種類の文献を指す。1) Latin *Herbarius* (1484)。これはまた *Herbarius in Latino*, *Herbarius Moguntius* などとも称される。2) German *Herbarius* (1485)。別名は *Herbarius zu Teutsch* である。3) (H) *Ortus Sanitatis* (1491)。ドイツ語名は *Der Gart der Gesundheit* (健康の庭) である。

ドイツのマインツで出版されたこれら 3 種の文献は、当時の本草書としては模範的な役割を演じ、ヨーロッパ諸語にも翻訳され広く流布したと思われる。たとえば 2) はフランスの *Le grand Herbar* (1529) やイギリスの *The grete herbal* (1526) などにも大きな影響を与えたと想像されているし、3) は長期にわたり本草書のベストセラーとなっている。しかしながら、ヨーロッパ諸国へそのような大きな影響を与えたと考えられるにもかかわらず、その資料の文献学的・体系的研究は、まだ不十分な状態のままである。したがってまた、それらの本草書のヨーロッパ諸国への影響についての実証的な研究もまだなされていない状況にある。

そのような研究の現状を踏まえ、本研究で

は、マインツで出版された上記 3 群の植物誌に関してその特徴を分析した上で、ヨーロッパ諸国 (オランダ, フランス, イギリス) の諸文献との関連について、またその影響力について実証的・文献学的に調査・比較検討する。

3. 研究の方法

(1) 研究はまず資料の収集から開始した。近世初期の植物誌関連の文献資料、特にインキュナブラ (揺籃期本) には入手することが困難なものが多いが、今回は「2. 研究の目的」で挙げた 1) を Peter Schöffer: *Herbarius Latinus*, Mainz 1484 (Harald Fischer Verlag) という CD-ROM で購入した。また、同じく 3) は *Hortus sanitatis: deutsch/des Johannes Wonnecke von Cube*. Reprint-Ausgabe Mainz: Schöffer 1485. München: Köbl 1966 という復刻版をドイツ・オーストリアにて行った文献収集調査の際に入手することができた。

(2) そのようにして入手した資料は、「2. 研究の目的」に挙げた 1) から 3) の順に文献学的な分析調査を加えた。

初年度 (2006 年度) *Herbarius Latinus* の解読に当たった。この書は、ドイツのインキュナブラ時代に発行された最初のイラスト入りの本草書で、医師あるいは直接医師にかかれぬがラテン語の読める市民のために構想され、平易なラテン語で書かれている。全体は 2 部からなるが、主要部は第 1 部で、その内容はドイツを含む中部ヨーロッパの 150 種の薬草の効能がイラストとともに記述されている。なお、植物のラテン語名にはドイツ語名が付記されていて当時の語彙を知る上で大変参考となる。続く第 2 部は、通じ薬などに役立つ 96 種の植物・鉱物・動物が紹介されている。

第 2 年度 (2007 年度) こちらの資料が先に手に入ったので (H) *Ortus Sanitatis* (『健康の庭』) を 1 年繰り上げて解読に着手した。著者はマインツの医師ヨーハネス・ヴォネッケ・フォン・カウプ (Johannes Wonnecke von Kaub) である。15 世紀の中ごろドイツ語で書かれた本書はドイツ中世の本草学を近世へ伝えた極めて重要な文献であるが、その影響力の大きさは 17 世紀までに 60 版を数えたことからみてもとれる。全体で 435 章からなり、その内訳は 382 章が薬草に、25 章が動物に、28 章が鉱物に由来する薬を扱っている。また、全体を通して古代の「体液病理学説」に則った説明がなされている。

最終年度 (2008 年度) 前年度において取り上げた『健康の庭』は当時の医学的世界観と

緊密に関連していることが判明したため、15・16世紀にドイツ語圏で最も広く知られた医学書の一つであるオルトルフ・フォン・バイアーラント(Ortolf von Baierland)の『医学書』(Das Arzneibuch)を新たな分析対象として加えた。ドイツ語で書かれた本書は、ラテン語を理解しない実地医、特に外科医のために編集された医学ハンドブックともいえるべき著作である。全3部、167章からなる本文より、今回は特に第2部第4論の「(偽)ヒポクラテスの基づく予断的・予後的覚え書き」の訳読を行った。これらの章では、(偽)ヒポクラテスに依拠しながら「死兆」について進められる議論は、1)死の予見の可能性についての一般的な説明、2)特定の疾病に依存しない予見、3)特定の疾病に依存する予見、の3種類に分類することができる。また、本書の全体を通しての説明がここでも「体液病理学説」に依拠していることが確認された。

4. 研究成果

(1) 本研究では、既に述べたように、「2. 研究の目的」にあげた3種の資料のうち主として1))Latin Herbarius(1484)と3) (H)Ortus Sanitatis (1491)の文献解読を行うことができた。また、当初の計画には含まれてはいなかったが、植物誌と医学との関連を確認することが必要となったためにオルトルフ・フォン・バイアーラント(Ortolf von Baierland)の『医学書』(Das Arzneibuch)を分析対象に追加した。なお、2) German Herbarius (1485)は入手できなかったため、今回は残念ながら調査することができなかった。しかしながら、今回の3種類の文献の調査により、ヨーロッパ諸国へ大きな影響を及ぼしたとされる「マインツ本草書群」についてその特徴の概略をつかむことができた。それは以下の3点にまとめることができる。

ラテン語で Herbarius、ドイツ語で Kräuterbuch と称される書物は、単なる近世の「植物分類図鑑」のようなものではなく、まずは「医学書」を意味した。しかも、それは「薬草」によるものを、つまり東洋の「漢方」に相当するものを主だった内容にしているにせよ、植物のみならず、動物や鉱物による薬も含んでおり、「薬草書」よりかなり広範な概念であったことがわかる。

中世後期から近世初期にかけて成立した本草書には、それらがまさに時代の端境期に位置するがゆえに、2つの時期の知識や世界観が混在していることが大きな特徴と言える。例えば、今回とりあげた『健康の庭』には植物だけでも350枚もの色刷りの挿絵が含まれているが、これはこの本の依頼人が聖地巡礼の際にオランダ人版画家エルハルト・ロイビヒを同行させ、本国には生育しない様々

な植物をスケッチさせた成果であった。これなどは近世の自然観察のさきがけとなるような実証的態度の反映であろう。しかしそれと並んで、あるいはむしろ中心となる説明は、もっぱら古代・中世的な民間療法に関するものである。しかも、これらの多くは占星術・呪術的信仰に基づくものである。その典拠とされるのがプリニウス、ディオスコリデス、イシドールなどの古代・中世の医学の大家であった。例えば、ディオスコリデスの説く「ヨモギを家の中に持っている人に、悪魔は手出しができない」というような例がそれにあたる。

さらに中世の本草書のもう一つの特徴は、それらの学説がヒポクラテスやガレノスといった古代の医学者によって整備された「体液病理学説」(Humoropathologie)あるいは「四大説」に基づいていることである。この学説とは、身体健康や病気を4種類の体液(血液・粘液・赤胆汁・黒胆汁)およびそれを構成する四大(空気、水、火、土)の均衡のとれた調和あるいは不均衡によって説明しようとするものである。そして、諸体液の均衡をチェックするのがウロスコピーつまり「検尿」である。本草書にはほとんど必ずといってよいほど「尿」に関する章が含まれている。実際、『健康の庭』には検尿瓶を手にした医師が描かれている。ウロスコピーの目的は、尿の沈澱、混濁、色などによって健康状態や病気を診断することにあり、本草書は体液の正しいバランスを取り戻すための処方箋の役目を果たしている。なお、これと類似の説明は、オルトルフ・フォン・バイアーラントの『医学書』にも見いだせる。

(2) なお今回の調査では、「マインツ本草書」の文献学的調査に予想以上に時間をとられ、研究計画に含まれていた「マインツ本草書」のヨーロッパ諸国への影響については十分な調査ができなかった。これについては今後の継続課題としたい。しかし、今回の研究により、これらの資料の文化史的な位置づけについての輪郭はほぼ正確に把握することができたと考える。つまり当時の本草書は、植物学、医学、呪術、魔術、占星術などが混然一体となった知識体系であり、それを支えているのが宇宙の万物は大きな一本の鎖(つまり四大説)で繋がれているという世界観である。それは宇宙を「マクロコスモス」、人体を「ミクロコスモス」として、その間には対応し合う「照応関係」があるとするオカルト的な宇宙観であった。これを中世の本草書が近世の植物学へとどのように変化していったのかということについての関連でいえば、それは、とりもなおさず、まず本草書のそれを構成するいくつかの知の領域(植物学、医学、天文学など)への解体なくては成立しな

かったということになる。つまり「存在の連鎖」の放棄こそが近代の自然科学を可能にしたわけである。ところで、現代社会は細分化した自然科学への反省から逆にエコロジカルな世界観が見直されつつある。これは中世の「全てはつながっている」というシンプルな世界観とも相呼応する視点といえよう。今回試みたような本草書とその後世への影響関係を研究することは、本草書の背後にある価値観に再評価と同時に、そのような価値観を一度は放棄した近世以降の自然科学を相対化する契機ともなるであろう。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計3件)

荻野蔵平, パウアー・トビアス, (翻訳)「オルトルト・フォン・パイアーラント『薬方書』(Arzneibuch)」熊本大学文学部『文学部論叢』第100号, p.135-144, 2009年, 査読無。

荻野蔵平, パウアー・トビアス, (翻訳)「健康の庭」熊本大学文学部『文学部論叢』第98号, p.167-182, 2008年, 査読無。

パウアー・トビアス, 荻野蔵平, Elemente der antiken Humoralpathologie im “Gart der Gesundheit”, 熊本大学大学院社会文化科学研究科『熊本大学社会文化研究』第6号, p.41-58, 2008年, 査読無。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

荻野 蔵平 (OGINO KURAHEI)

熊本大学・文学部・教授

研究者番号：00134429

(2) 研究分担者

高宮 正之 (TAKAMIYA MASAYUKI)

熊本大学・大学院自然科学研究科・教授

研究者番号：70179555

パウアー トビアス (BAUER TOBIAS)

熊本大学・文学部・准教授

研究者番号：30398185

(3) 連携研究者

なし